

## 「コミュニティ再生及びボランティア活動支援」事業

### 被災した多くの移動困難者をサポートするため 支援カーが今日も牡鹿半島を疾駆する

東日本大震災で多くの犠牲者を出した宮城県石巻市。その東端にある牡鹿半島には、高齢者を初めとする移動困難者が暮らしている。一般社団法人キャンナス東北はそれをサポートするための活動を行っているが、唯一の移動手段である自動車は酷使されて使えなくなっていた。今回AJOSCの助成によって、新たな支援カーをリースし活動範囲を広げている。

#### 慣れない避難所暮らしが 高齢者を弱らせていた

キャンナスは、訪問ボランティアナース(看護師)たちの会で、「デキル(Can) ことをデキル範囲で行うナース(Nurse)」の意味で名付けられた。訪問看護を中心に全国でボランティア活動をしている。

キャンナス東北の石巻事務所は東日本大震災を契機として誕生した。所長の高橋誠さんは、震災時津波に流され、九死に一生を得るような体験をしている。

「水を飲んで、もうダメだと思ったときに水面らしきものが見えて夢中で泳いだ」と高橋さん。以後、避難所での

生活が続いた。スタッフの山田葉子さんも寸前のところで逃げ延びたが、家は流され現在は仮設住宅で暮らしている。二人が出会ったのも避難所だった。

命はとりとめたものの、高橋さんの精神的なショックは大きかった。魚市場関係で仕事をしていたが大勢の知り合いが亡くなった。先のことなど考えようもなかった。

気付いた時、高橋さんたちは避難所で住民たちを支援するボランティア活動をしていた。

「何も考えず、目の前の仕事をもくもくとこなすことで、落胆や不安をふりほどくことが動機だったかもしれません」

避難所にいた人々もみな同様に落ち込んでいた。特に高齢者は不慣れな避難所生活のために急速に体力が衰え、精神も萎え、急速に弱ってしまう人が多かった。彼らをサポートすることが高橋さんたちの日課になったのである。

キャンナスは石巻市や気仙沼などの避難所を中心に、感染症防止などの医療支援や生活支援を行っていたが、避難所の閉鎖後も支援を継続するため、拠点として石巻事務所を開設することになった。高橋さんらは、避難所時



子どもや高齢者が集まる「おらほの家」は、震災で失った地域コミュニティを再生させている

代の縁でキャンナスで活動するようになった。被災者には微妙な感情があり、避難所や仮設住宅暮らしを経験していないと受け入れられないところもある。高橋さんたちはうってつけの担い手だった。

#### 「おらほの家」に 笑い声が戻ってきた

高橋さんたちの活動エリアは、宮城県北東部、三陸海岸の最南端にある牡鹿半島。主な活動は、派遣されてくる看護師や医療職を仮設住宅や被災者の自宅へ、また対象者たちを健康相談会などにつれていくことだが、買い物支援や相談役など、医療を離れた生活全般のサポートなど守備範囲は実に広い。

もとより軌道交通の無い町で、自動車だけが頼りだ。しかし被災1年目、用意したクルマはあっという間に音をあげてしまった。曲がりくねった山道に瓦礫などが散乱し、タイヤはすぐにパンクし、車体も傷んでしまった。

「このままでは活動できなくなる。と思った矢先に

#### 担当者より



これでボランティア活動を続けられる！  
喜びでいっぱいでした。

一般社団法人キャンナス東北  
石巻事務所  
所長  
高橋誠さん

AJOSCの助成はまさに渡りに船でした。移動困難者の多い地域で、今すぐ必要な物資も数多くあります。被災で多くの命を失いましたが、人の優しさにも触れることができました。誰もが人の役に立ちたいという気持ちがあります。AJOSCの助成はそれを手助けしてくれる強い味方だと思います。ありがとうございました。

AJOSCの助成を受けることができたのです」と高橋さん。キャンナス東北がリースした新しい支援カーは、要員や機材を載せ大車輪で活躍し始めた。

また、新たな支援拠点として、「おらほの家」(私たちの家の意味)が開設された。民家だったものだが、家主は他の地域に引っ越し、この活動のために提供してくれた。利用者たちは支援カーで運ばれてきて、ここでさまざまなことをして時を過ごす。誰かが自慢の料理を作ってみなで食べたり、編み物をしたりする。庭の畑で野菜などを植えることもあれば、時には高橋さんらがカラオケ機材を持ち込む時もある。そして「お茶っこ」(茶飲み話)で、談笑する。この家では笑い声が絶えない。「こういうのんびりとした時間が今は一番の楽しみ」という高齢者は多い。

「被災前にはごく日常的に行われていたご近所さんとの会話が途絶えたことが、意外と大きな痛手になっているのです。ここはそれを取り戻すひとつのきっかけなのだと思います」と山田さんは語る。

AJOSCの助成によって「おらほの家」の入口の車寄せに雨よけの屋根も設置された。車椅子の人や歩くのが遅い高齢者でも雨に濡れることなく、乗降できるので好評である。

「おかげさまで利用者、利用回数とも増えています。まだまだ復興のまったなかですが、コミュニティの再生に向けてがんばりたい」と、高橋さんは力強く語った。



AJOSCの助成によりリースした支援カーで、看護師や栄養士などを避難所や被災者の家まで運ぶ

被災者支援拠点として開設した「おらほの家」